介護技術コンテストでは、2年前に脳梗塞で入院し、軽度の麻痺と中等度の認知症がみられる78歳の女性の介護という課題に対し、全国の12チームが介護技術を競いました。

＜第9回全国高校生介護技術コンテスト＞
【文部科学大臣賞】佐賀県立嬉野高等学校
一ノ瀬 弥月、田中 佑奈、河上 愛菜

ロボット競技大会では、りんごと岩木山をテーマに、全国の96チームが競いました。決勝ではパーフェクトであるVゴールが続出し、タイムで競い合う白熱したものとなりました。

＜第30回全国高等学校ロボット競技大会＞
【文部科学大臣賞】学校法人不二越工業高等学校　TREU

実習船青森丸一般公開では、今年度で引退を迎え、19年間海洋実習で生徒の学びを支えた六代目実習船青森丸の船内を、感謝の意味も込めて一般公開しました。

第64回全国産業教育振興大会では、三内丸山遺跡センターの岡田所長による講演、大会決議文の協議・採択を行いました。また、全国から来られた皆様に対するおもてなしとして、津軽民謡歌手かすみさんによる、津軽の民謡と手踊りを披露しました。

＜実習船青森丸一般公開＞

＜第64回全国産業教育振興大会後のおもてなし＞

「文部科学省事業発表会」では、文部科学省の地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）の研究指定校で学ぶ生徒たちによる、実践内容や事業を通して学んだ成果等についての発表や展示が行われ、専門高校の優れた教育活動と生徒たちの学習成果を来場者に伝えることができました。

＜文部科学省事業発表会の様子＞

高校生の想いや希望は、交流を通して次期開催県の福井県の高校生に引き継がれました。

<福井県（次期開催県）との交流>

総合閉会式では、次期開催県となる福井県に大会旗の引継ぎを行いました。

<大会旗引継>

本大会を通じて、令和3年度の発足当初はあどけなかった生徒実行委員会が、コロナ禍で準備を進めなければならない中でもSNS等をフル活用してコミュニケーションを深め、課題発見・解決していく逞しさや、主体的にアトラクションのシナリオ作成を進めていく態度など、回を重ねるごとにどんどん成長していく姿に驚かされました。また、産業教育を教える側の教職員の協力体制や機動力の高さも素晴らしいものでした。

本大会はこのような生徒約1,500人、教職員約400人、教育委員会約50人によって運営され、2日間の来場者数は延べ10万2千人となりました。

<大会直後の生徒実行委員会>

コロナ禍ではありましたが、参集型で開催することに対する外部から寄せられた意見は1件も無く、むしろ「コロナ禍で学校行事等が制限される中、高校生が活躍できる場を作ってくれたことに感謝したい」という声をいただきました。お陰様で産業教育の醍醐味である、本物や実物に触れ、基本方針にあるとおり「体感できるフェア」とすることができました。

<タッチプール>

次回の第33回大会は、福井県の「福井県産業会館」を主会場に、令和5年10月28日（土）、29日（日）に開催される予定です。

最後に、本大会の実施に御尽力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げますとともに御参加いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

大会マスコット「さんまる」
（三内丸山遺跡マスコット）